

佐々木利和著

『アイヌ絵誌の研究』

市毛 幹幸

非文字社会に生き、自らの歴史・風俗・文化を記録したり、絵画などに表現する習慣を持たなかった日本近世におけるアイヌの歴史研究は、何らかの形式でアイヌ社会に接する機会を持った人々の遺した記録に基づいて進められてきた。そして、多様な研究が蓄積されるなか、アイヌ自身の口承資料や考古・民俗資料など隣接諸学の成果受容の必要性、アイヌを日本人の側から捉えるだけでなく、相対化して、アイヌを主体とする歴史叙述、つまり、「アイヌ史」構築とその方法論確立の必要性が認識・主張されてきている。

アイヌの民族文化研究の第一線で、多様な研究活動を展開している佐々木利和氏は、アイヌの歴史叙述の可能性が、アイヌの生活誌、文化誌、民族誌を復元的に考察することにより得られるとして、アイヌの生活・文化を総合的に記述した「アイヌ民族誌」を構想している。そして、その方法論が提示されたのが、本書『アイヌ絵誌の研究』である。

美術史、絵画史を専門とせず、アイヌの歴史に関心のある初学者にすぎない筆者がこの大著を批評するほどの能力を持ち合わせていようはずはなく、以下では本書の構成と内容を紹介する。尚、紙幅の関係から章中の節・項については割愛する。また、本稿では、佐々木氏が考察の対象とするアイヌ絵作品は主要なもののみをとりあげる。佐々木氏が用い

ている他のアイヌ絵作品を含めて、その詳細なデータについては本書を参照されたい。但し、紹介の必要上、所蔵機関を示す際には「〇〇本」と表記する場合がある。以上のことをあらかじめおことわりしておく。

冒頭の「序にかえて―あるアイヌ絵の解釈」(図一、図版編二二二～二二五頁)においては、アイヌ絵を見る際の心構えとして、描かれた対象が異文化の場合、その最低限の文化理解が必要であることが戒めを込めて指摘される。ここでの指摘からは佐々木氏のアイヌの民族文化に対する非常に真摯な姿勢が窺える。

以下が本論であるが、序編「アイヌ絵という概念」においては、アイヌ絵からはそれを描いた人々のアイヌ観が窺い知れること、アイヌ絵が「アイヌ史」叙述の基礎となるアイヌ民族誌記述のための好資料となる可能性を秘めていることを指摘した上で、アイヌ絵が如何なるものなのか定義づけられる。

第一章「アイヌ絵の概念」では、アイヌ絵はアイヌの民族芸術ではないとした上で広・狭二義のアイヌ絵概念について説明される。広義のアイヌ絵とは蝦夷、アイヌ、その周辺の北方諸民族を含み、それらが描かれているもので、制作年代や画題などの制約一切を設けず、従来のアイヌ絵研究の対象となる作品群であるという。また、狭義のアイヌ絵とは日本史の近世(厳密にはアイヌ絵師平沢屏山の死(明治九年(一八七六))を下限とする)を制作年期として、アイヌの生活、風俗、文化を描出する内容を持ち、シャモ(佐々木氏はアイヌ語母語者(その自称が「アイヌ」)に対する日本語母語者の呼称として、従来使用されている「和人」は広く日本列島に居住する人々を指す用語ではないこと、日本語母語者は「ワジン」と自称

しないこと(佐々木氏は日本語母語者が民族自称を持っていないとも指摘している)、正保三年(一六四六)成立の「新羅之記録」で日本語母語者を指して「者某」の語が使用されるなど「シャモ」が古くから多くの古記録で用いられる言葉であることなどから「シャモ」を使用している。本稿では「書評と紹介」という性格上、以下、佐々木氏の用語に従って日本語母語者の呼称に「シャモ」を使用する)が描いたものと定義する(但し、佐々木氏は版画・版本類を大量の流布を目的とし、アイヌの文化を正視する視点に欠け、アイヌ民族誌の記述に益しないものとして、狭義のアイヌ絵概念に含めていない)。

第二章「アイヌ絵の世界」(図二、図版編二二六～二四一頁)では、実際に狭義の概念に属するアイヌ絵を用いて、描かれた当時のアイヌの日常生活や場所請負制下の運上屋(会所)でのアイヌ労働の在り方について復元的考察がなされる。アイヌ民族誌を記述するためのアイヌ絵の資料としての可能性が論証され、佐々木氏の方法論が示されている。

第一編「蝦夷のイメージ」においては、広義のアイヌ絵作品群を用いて、シャモが数少ない情報から捉えた異文化世界に生きる人々のイメージについて考察が行われる。

第一章「聖徳太子伝説と蝦夷」(図四、図版編二四二～二五四頁)では、まず、数種の「聖徳太子絵伝」の書誌的考察が行われる。その上で、研究史上の、元亨三年(一三三三)頃成立の茨城県上宮寺本が蝦夷を描いた最古のものであり、そこにはアイヌの特徴が数多く認められるという言説に対して、佐々木氏は「聖徳太子絵伝」最古の蝦夷描写は延久元年(一〇六九)の東京国立博物館本であることを指摘する。そして、描かれた蝦夷の詳細な観察の結果、蝦夷は周囲に描かれる人々とは明らかに

異なる姿をしており、当時の蝦夷は異俗の人々として認識されていたと述べる。また、鎌倉期以降の作品群の比較検討、分析から全体的にアイヌの特徴が強くあらわれており、これらの作品群のうち元亨四年（一二三四）の詞書を持つ旧堂本家本の蝦夷の姿はアイヌといえると結論している。

第二章「坂上田村麿伝説と蝦夷―『清水寺縁起』による―」（図五、図版編二五五～二五七頁）では、清水寺とその創建に関わった坂上田村麿を画題とした、永正十四年（一五一七）成立の「清水寺縁起」の詞書と田村麿伝説の中心となる蝦夷征伐に描かれた蝦夷の分析が行われる。そして、ここに描出された蝦夷は「鬼」・「邪気」に仏敵に仮託されたイメージで捉えられていると結論する。また、この作品が「蒙古襲来絵詞」（十三世紀末成立）の影響を受けたものであると指摘している。

第二編「描かれたアイヌの世界」においては、主として、狭義の概念に属するアイヌ絵を用いて、アイヌ文化をどう捉えるかという本書の主要課題が六章にわたって論ぜられる。

第一章「蛸崎波響と『東武画像』」（図六、図版編二五八～二六一頁）では、「夷酋列像」（寛政二年（一七九〇）成立）の作者、蛸崎波響の波響銘での最初期作品である「東武画像」（天明三年（一七八三）成立）を考察対象としている。そして、この作品が波響自筆作品であることを実証して、「東武」という実在のアイヌ男性を写生技法によって写実的に描いたものと指摘し、十八世紀末のアイヌの風貌を確実に後世に伝えたものと評価する。

第二章「秦檜とアイヌ」（図七、図版編二六二～二七八頁）では、秦檜

麿の「蝦夷島奇観」を主要な考察対象としている。この作品は当時のアイヌ文化、社会を知る上で高い資料的価値を持つとされ、実際、アイヌ文化研究でも多用される作品である。佐々木氏は、この作品の多くの類本を比較検討して東京国立博物館本（旧堀田家本）が檜自筆本で、寛政十二年（一八〇〇）の成立であると指摘する。また、檜自筆の諸本を紹介し、描かれた「熊祭」、「臘臍臍」を分析して、檜作品の資料としての有用性を評価している。

第三章「村上貞助、F・シーボルトとアイヌ風俗」（図八、図版編二七九～三〇頁）では、シーボルト事件（文政二年（一八二八）に際して長崎奉行所が没収した「樺太風俗図」（文政一年頃の成立か）を主要な考察対象としている。この作品はカラフト南部のアイヌ、北部のウイльта、ニプフ、アムール川下流域の諸民族の生活、風俗、文化を伝えた広義のアイヌ絵である。佐々木氏はこの作品について、作者が川原慶賀であること、間宮林蔵述・村上貞助筆録「北夷分界余話」、「東韃地方紀行」（文化七年（一八一〇）成立、文化八年（一八一）浄書の上、幕府へ献上）の模写であることを指摘している。また、「樺太風俗図」の底本とされてきた「北夷分界余話」の初稿本である「北夷蝦夷地部」についても分析して、これが村上貞助自筆本であり、文化八年以前の成立と指摘した上で、「樺太風俗図」の底本とはいえないが、深い影響を与えていると結論づける。更に、「樺太風俗図」の各々の画面下部に付されたシーボルト自身の説明書きを分析して、シーボルトの北方諸民族文化に対する認識の有り様にも付言している。そして、「樺太風俗図」は第一次資料ではないが、「北夷分界余話」と対比することで十九世紀初頭のアイ

又と周辺諸民族の文化を復元できる有効な資料であると評価している。

第四章「松浦武四郎とアイヌ―『蝦夷漫画』の世界―」(図九、図版編三二一〜三三二頁)では、狭義のアイヌ絵概念に含まれない版画・版本類から松浦武四郎の「蝦夷漫画」(安政六年(一八五九)出版)をとりあげ、翻刻・解説が施され考察がなされる。そして、この作品が「蝦夷島奇観」などの秦意磨作品を基に武四郎自身の知見を加えて成立したものと結論する。しかし、佐々木氏は武四郎の知見による記述以外は武四郎が基にした意磨の版本に意磨の手を離れた後の版本製作の過程で誤りが生じた可能性があることを示唆して、その引用には注意を要することを指摘している。ここでは、序編において述べられるように版画・版本の不確実性が論証されている。

第五章「平沢屏山とアイヌ」(図一〇、図版編三三三〜三五二頁)は、狭義のアイヌ絵概念下限期の作家、平沢屏山研究となっている。屏山の作品は、その正確性、アイヌ文化研究の資料としての有用性がアイヌ民族学の立場から高く評価されているという。にもかかわらず、佐々木氏によれば、屏山は謎の多い人物であり、閲歴、「屏山」号の読み方も明らかではなく、自らの作品に年記を施すこともほとんどなかったため、その画業を研究することも困難であるという。佐々木氏は、まず、屏山の閲歴を追究・整理し、次にその作品「蝦夷風俗十二ヵ月図」をとりあげて考察を行っている。そして、分蔵されている天理大学付属図書館本、市立函館博物館本、岩手県大迫町本が本来は一具のものであったこと、制作年代が明治四十九年(一八七九)であることを結論づけ、この作品は屏山が自己の画業の全てを注入した代表作であると評価する。

また、海外で所蔵される屏山の在記年銘作品十点や大英博物館で佐々木氏が発見した粉本七点を紹介して、これらを今後の屏山研究に益する資料(特に前者は基準作)として評価している。

第六章「富岡鉄斎とアイヌ―近代アイヌ絵の萌芽―」(図一一、図版編三五三〜三五四頁)では、狭義のアイヌ絵概念に含まれない近代の作家、富岡鉄斎のアイヌを画題とした数多くの作品から「旧蝦夷風俗図屏風」(明治二十九年(一八九六)成立)を主要な対象として考察を行っている。そして、研究史上、鉄斎のアイヌ絵作品が実際の調査に基づく作品とされていることに対して、佐々木氏は、鉄斎作品はアイヌを「人としてとらえた作品」と評価しながらも、その北海道行程の行程を分析して、それは実際の観察記録ではなく、全て何らかの典拠に基づくものであると指摘している。また、このことから鉄斎作品はアイヌ民族誌の資料として使用できないと結論づけている。

筆者が紹介してきた内容には筆者自身の無知、誤読による佐々木氏の考察、論述への誤解があるかもしれない。佐々木氏に非礼を重ねることになるかもしれないが、最後に通読しての感想を述べて拙文を終えたい。佐々木氏は本書のなかで、アイヌ絵がアイヌ自らの芸術作品ではなく、シャモの偏見、無知、差別観などのフィルターを通した風俗描写であること、しかし、非文字社会であったアイヌの歴史を語るためには、その時代ごとの確実な民族誌を記述することから始める必要性があり、アイヌ絵作品群が、描かれた当時のアイヌの生活、風俗、文化を窺い知るための貴重な資料であることを繰り返し述べている。そして、アイヌ絵作品群からそれらが秘める豊かな内容を読み取るためには、あらゆる角度

からのアイヌ知識が必須であることを強調している。これらの指摘は、アイヌの民族文化をあらゆる角度から研究し、紹介することを実践してきた佐々木氏ならではのものであり、その強調された言葉の意味は、アイヌ文化に関心を持つ者にとって、深く重いものである。

佐々木氏は、また、アイヌの歴史叙述の基礎となるアイヌ民族誌構築の第一の作業として、アイヌ絵に描かれたなかから「確かなもの」を見出すこと、第二の作業として、それらの分析を進め、ある時期における精度の高い民族誌を記述することを挙げている。

このことに関して、まず、アイヌ絵に描かれたなかから「確かなもの」を見出すためになされた各アイヌ絵作品の書誌的な考察、比較分析の実証的手法は絵画資料論としても学ぶところが多いと思われる。また、各アイヌ絵作品に付された解説も充実した内容となっている。次に、第二の作業であるが、アイヌ絵の細部にわたる分析によって抽出された「確かなもの」についても具体的、且つ要を得た明晰な解説が施されており理解がし易い点、非常に有り難かった。ただ、第一の作業上必要な手続きの方に行論の重きが置かれているように思われ、読者としてはそちらに目が奪われてしまう傾向があるように感じた。これは、決して「確かなもの」の分析、説明が不十分であったといっているのではなく、例えば、描かれたアイヌの生業・技術、容姿・身振り、諸道具などについて、図版編に豊富に収載されたアイヌ絵相互を比較考察して、それらの持つ「アイヌ史的・アイヌ文化史的意義などについて、より多くの言及を施した一編が設けられたなら、更に有り難かったという意味である。或いは、この点、佐々木氏は本書においてはアイヌ絵研究で

「確かなもの」の抽出と分析やその方法論の提示に焦点を絞り、アイヌ民族誌記述は前著『アイヌ文化誌ノート』歴史文化ライブラリー二二八（吉川弘文館 二〇〇一年）において意図していたのかもしれない、両論著を併読することでアイヌ文化理解は更に深められるように思われる。

図版編はこれだけで、一つのアイヌ絵画集になるほどの豊富さである。ただ、本書を用いる際の利便性のために、本編と図版編を分冊にした方がよいように思った。また、本編の文章に少々誤植が目立つこと、図版編に「図三」が存在しないことや「図九」のなかの図像にブレがあるのは惜しいことであつた。しかし、これらのことは本書の価値を減ずるものではない。

今後、佐々木氏が本書で示した方法論を基に、より多くのアイヌ絵研究が蓄積されることであろう。そうした成果を集約して、例えば、アイヌ絵ごとに全体図と分割図に分け、全体図においては背景のなかにアイヌの生活、風俗、文化が窺えるようにし、分割図でその詳細が知れるようにして、更に、双方に共通番号、解説を付し、巻末に住居・施設、衣食、生業・技術、交易・交易品、容姿・身振り、信仰・儀礼、娯楽・遊戯、子供の世界など項目別に分類配列した索引などを設けた「アイヌ風俗、文化絵引」のような成果が得られること、そして何より、本書がアイヌ民族誌の記述、アイヌの歴史叙述へ向けて有効に活用されていくことを望みたい。

（B5判、三六五頁、草風館、二〇〇四年二月刊、一五〇〇〇円）
（いちげ・もとゆき 弘前大学大学院地域社会研究科後期博士課程）